

## (6) 市動植物園の創設② ～開園から閉園まで～

昭和7年9月28日、福岡市動植物園の地鎮祭が東公園内の同敷地内で挙行され、翌8年4月20日の開園を目標に着工しました。これによって、昭和8年3月の予算市会は、動植物園の歳入歳出予算、観覧料条例に関する2議案が付議され、1日当たりの売上げや観覧者数の見込みなどについて質疑応答の後、可決されました。

御大典記念福岡市動植物園は、東公園内樹木の伐採などで工事が遅れたものの、昭和8年8月16日に完成し、同月20日に開園しました。開園式は翌9年4月11日、園内式場に久世市長、太田市議会議長らが参列して盛大に行われました。昭和3年の発議以来ほぼ5年を費やした動植物園の創設でした。

動植物園は開園以来、盛況を極め、観覧者数は予想していた年間21万人をはるかに超えるものとなりました。しかし、開園の物珍しさは年を経るごとに観覧者の減少となって表れてきたため、昭和11年2月3日の市会は7人の議員の建議による「動植物園拡張建議案」を付議、採択しました。

昭和13年の伝染病の発生により、海水浴を奪われた家族が動植物園をにぎわす結果となりました。意外な盛況により市当局は園舎を増築し、カバ、蛇、サルなどの動物を数年ぶりに購入しました。昭和14年3月16日の市会で「拡張して観覧者の吸収に努め御大典を記念する一面、財源の乏しい本市の一財源たらしめることは、いわゆる一石二鳥の案と考える。(中略)私は動植物園の拡張に対し、いまが空前の好機会であると考え、市長は動植物園をさらに完備充実し市民にサービスする考えはないか」という議員からの質問に対し、「もっともなことだし、動植物園がだれも今のままで十分とは考えていないだろう。将来、予算のことも考え充実完備させていきたいと思っている」との市長答弁がなされています。

福岡市動植物園の盛況は翌15年も続きましたが、その後は戦時色を反映し、下り坂となりました。戦局の推移により資材難、燃料や餌の不足と価格の高騰に加え、動物の入手も困難となり施設の充実はなりませんでした。

昭和19年2月24日の市会で、畑山市長は「この時局下において動植物園の如きを経営していくということは非常に困難である(中略)あるいはこれを閉鎖しなければならぬかとも憂慮している」と答弁しています。

以上のような経過をたどり、動植物園は昭和19年5月20日、ついに閉園となりました。同年5月3日の市協議会で飼料の入手難と空襲を考慮に入れて検討された結果で、市当局は「一時休止」としたものの、事実上の閉園でした。同年6月6日、ライオン、トラなどの猛獣類は猟銃により処分され、あとは各方面に入札などにより売却、または寄贈されました。6月7日には開園後に亡くなった動物たちの慰霊祭が行われ、10年9カ月にわたって市民に親しまれた東公園の福岡市動植物園はその幕を閉じたのです。